金光教 KONKOKYO

『天地は語る』から 検索結果

『金光教教典』から400のみ教えを抽出し、現代語訳を施し、「神と人間」「人間の難儀」「信心とおかげ」など、事項別に編集しました。持ち運びできる新書版サイズです。

教祖金光大神様の信心を理解する書として、また、信心生活を勧める糧として広く活用され、さらには、『金光教教典』に接する機会になればと願っています。

該当レコード数　：　400　件

1　天と地の間に人間がいる。天は父、地は母である。人間、また草木など、みな天の恵みを受けて、地上に生きているのである。

2　天地は生き通しである。天地が生きているから、人間もみな生きていられるのである。

3　天地金乃神（てんちかねのかみ）は、昔からある神である。途中（とちゅう）からできた神ではない。天地ははやることがない。はやることがなければ終わりもない。天地日月（じつげつ）の心になることが大切である。信心はしなくてもおかげは授けてある。

4　神は人間の本体の親である。信心するのは親に孝行するのと同じようなものである。

5　天地金乃神は人間の親神である。かわいいわが子を、どうして難儀（なんぎ）に遭（あ）わせなさるであろうか。わが子をもって納得するがよい。

6　わが子のかわいさを知って、神が人間をお守りくださることを悟（さと）れよ。

7　目には見えないが、神の中を分けて通っているようなものである。畑で仕事をしていようが、道を歩いていようが、天地金乃神の広前は世界中である。

8　天地金乃神が社（やしろ）に入られたら、この世は暗闇（くらやみ）になる。神の社は、この天と地である。

9　天地金乃神のご神体は天地である。宮社（みややしろ）に鎮（しず）まり納まっておられるのではない。真（まこと）一心の心に神がおられて、おかげになる。

10　大阪からお参りしたある信者が、「金光様、大阪は広うございます。４区２郡に分かれておりますから」と申しあげたら、「大阪は広いなあ。しかし、神から見ればけし粒（つぶ）よりは少し小さかろう」と仰せられた。

11　人は十年は長いように思うけれども、神にとっては、あちらを向いてこちらを向く時間ほどもない。

12　神は声もなく、形も見えない。疑えば限りがない。恐れよ。疑いを去れ。

13　天地のことをあれやこれやと言う人があるが、人間では天地のことはわからない。天地のことが人間でわかれば、潮の満ち干もとめられよう。

14　天地金乃神は、幾（いく）千万年、天地のある限りただ一つであるけれども、ほかの神は年々に増える。

15　天地金乃神は、神、仏をいとわない。神道の身の上も仏教の身の上も、区別なしに守ってやる。神道も仏教も天地の間のものであるから、何派かに派などと、宗旨（しゅうし）論をしたり、凝（こ）り固まったりするような狭（せま）い心を持ってはいけない。心を広く持って、世界を広く考えていかなければいけない。

16　伊邪那岐（いざなぎ）、伊邪那美命（いざなみのみこと）も人間、天照大神（あまてらすおおみかみ）も人間であり、その続きの天子（てんし）様も人間であろう。神とはいうけれども、みな、天地金乃神から人体を受けておられるのである。天地の調えた食物をいただかれなければ命がもつまい。そうしてみれば、やはりみな、天が父、地が母であって、天地金乃神は一段上の神、神たる中の神であろう。

17　これまでは、忌み汚（けが）れを言う神ばかり。忌み汚れを言っていては、人は助からない。天地金乃神は、忌み汚れを言わない神である。ここをよく悟（さと）ることが大切である。

18　世界中、天（あめ）が下の者は、みな天地金乃神の子である。天地金乃神のおかげは世界にいっぱい満ちている。そのおかげがなければ空気がないのと同じで、人間は一時（いっとき）も生きてはいられない。

19　今も昔も、これから何万年たっても、世の中は変わりはしない。同じことである。人もきれなければ、食べ物もきれることはない。次々に種が生えて続いていく。

20　いろいろの神や仏に頼んで、おかげがあると言うけれども、おかげのできるもとは天地金乃神のほかにない。

21　願う心は神に届くものである。天地金乃神は、くもが糸を世界中に張ったのと同じことである。糸にとんぼがかかればびりびりと動いて、くもが出て来る。神も同じことで、空気の中にずっと神の道がついているから、どれほど離れていても、拝めばそれが神に届く。

22　天地金乃神のおかげで生かしてもらっている人間は、合わせ鏡の間に置いてもらっているようなものである。悪いことも善いことも、みな鏡に映るように神はご承知である。信心して、真（まこと）の心にならなければならない。

23　天地金乃神がお守りくださっていることを一番早く知るには、夏の土用に自分の腹をおさえてみよ。腹は冷たい。また、冬の寒中には、体の内へご陽気をお与えくださるので生きておられる。このようにお守りくださっている。四季に応じて昼夜の別なく、息のさし引きまでお守りくださるのである。

24　鳥や獣（けもの）がどのようにして生きていくかを考えてみても、神のお恵みがわかる。冬になったといって重ね着をするでもなく、夏になっても一枚も脱（ぬ）ぐことはない。神はそれでちゃんとさしつかえないように育てておられる。牛などが子を産んでも、別に親が暖めてやることもないが、それでも大きくなる。木にしても、はじめは目にも見えないような双葉（ふたば）であるが、だれが育てるということもないのに、大木になって世のためになる。人はみなその恩を受けている。このようなことを考えてみても、神のありがたいことがわかる。みな、よく物の道理を知って信心しなければならない。

25　山にも種々の物ができ、川にもいろいろの魚がいる。海にも種々の魚がいる。これを漁師が取って商人が売買し、だれでも好きな物を買い求めて食べ、体を丈夫（じょうぶ）にして世の中のために働くように神がお守りくだされている。なんでも世の中の実物にあたって考えれば、しだいにありがたいことがわかる。四季に応じて、毎年、人間が楽しみ待っている物ができる。それを買い求めて食べ、体を丈夫にしていただけるのである。四季の変わりは人の力では自由にならない。

26　水が毒というが、水を毒と思うな。水は薬という気になれ。水を薬という気になれば、腹の病気はさせない。水あたりということも言うな。水がなくては一日も暮（く）らせまい。稲（いね）の一穂（ほ）も五合（ごう）の水をもって締（し）め固めるというではないか。水の恩を知れ。

27　神は、体の毒を日に日に大便小便で取ってくださる。

28　神は、人間を救い助けてやろうと思っておられ、このほかには何もないのであるから、人の身の上にけっして無駄（むだ）事はなされない。信心しているがよい。みな末のおかげになる。

29　広い世間には、鬼（おに）のような心を持っている者もないとは言えないが、人間であったら、気の毒な者を見たり難儀（なんぎ）な者の話を聞けば、かわいそうになあ、何とかしてあげたらと思うものである。神の心は、このかわいいの一心である。

30　「烏（からす）をおとりにしてかすみ網で雀（すずめ）を捕（と）っていました。かわいそうなことをすると思いました」と申しあげたら、金光様は、「かわいいと思う心が、そのまま神である。それが神である」と仰せられた。

31　人間がおかげを受けてくれなければ、神も金光大神もうれしくない。人間がおかげを受けないで苦しんでいるようでは、神の役目が立たない。人間が立ち行かなければ、神も金光大神も立ち行かない。

32　同じように腹を痛めた子であれば、かわいさに違（ちが）いはないはずであるが、それなのに、不幸せな子ほどふびんであろう。神もそのとおりで、難の多い、不幸せな者ほど、おぼしめしが強い。

33　親は、心配させる不肖（ふしょう）な子ほどふびんに思うであろう。神も、神の心を知らないでいる者ほどかわいいと仰せになる。親を頼って来る子には、うまい物でもやれるが、来いと言っても、何かと逆らい、親を敵（かたき）のようにして、よそへ出てしまうと、どうしているだろうかとふびんに思う。親がそうして子をかわいがるのも、神が人間をかわいがってくださるのも、同じことである。

34　不信心者ほど神はかわいい。信心しておかげを受けてくれよ。

35　自分の信心が足りないためにおかげを受けられないのを、神のおかげがないように思っている。神はこれが情けなくてならない。

36　よく、神に捨てられた捨てられたと言うが、神はめったに捨てはしない。みな、人間の方から神を捨てるのである。

37　神を親と思って信心をしていれば、神の方から子と思う。たとえて言えば、子供のそばに、親がいなければ、悪い者に棒でたたかれることもあるが、親がついていればたたかれることはない。悪事災難は棒を持って来るのではないから、しのごうと思ってもしのげないけれども、神を父母と思って信心していれば、目に見えない所は神が守ってくださる。

38　神へは何でも願え。神は頼まれるのが役である。

39　天地金乃神はこの世の親神であるから、天地金乃神に信心しているといっても、していないといっても、天地の間に生きているからには、天地金乃神の子に変わりはない。

40　天（あめ）が下の者はみな、神の氏子である。天が下に他人はない。

41　人の身が大事か、わが身が大事か。人もわが身もみな人である。

42　疑いを放して広い真（まこと）の大道（おおみち）を知れよ。わが身は神徳の中に生かされている。

43　牛は人間とは違（ちが）い、寒い時でも寒さの用意もしないで、毛があるだけで、冬の寒中かぜもひかない。これは飼っている人間の力におよばない。鶏（にわとり）も山の鳥類、獣（けもの）も同様である。みな、神がお守りくださっていることを悟（さと）るのが人間である。

44　人間は小天地で、自分の頭をいつも神がお守りくだされているから、自分の体を思うように使えるのである。

45　人間はみな天地金乃神から人体を受け、御霊（みたま）を分けていただき、日々天地の調えてくださる食物をいただいて命をつないでいる。昔から、天は父、地は母というであろう。天地金乃神は人間の親である。信心をする者は、一生死なない父母に巡り会い、おかげを受けていくのである。

46　これまでは懐妊（かいにん）中の事柄（ことがら）を教えた者がないため、種々のことに迷っている。人間は何のおかげでできるのか。母の胎内（たいない）に宿り、妊娠したというのは、神が御霊（みたま）を授けてくださった時である。この御霊は、医師が腹を開いて、これが御霊であると言って人に見せることはできない。人間の目に見えない神から、肉眼で見ることのできない御霊をお授けくださるということは、ありがたいことである。人間の肉体は、母親が好きな物を食べ、血の増えるのをもとにして、一人の体が造られ、十月（とつき）前後で出産して、男子である、女子であると言う。懐妊中、神のお恵みでお造りくださるのである。

47　夫婦は他人の寄り合いである。仲よくすれば一代安心に暮（く）らせる。夫婦げんかをしても、あとから心が折り合う時、よく考えてみるとわけがわかる。この事柄（ことがら）を自分でわかるということは、神からお与えくだされた御霊（みたま）が、体の司（つかさ）だからである。

48　神も人も同じこと。いくら神を拝んでも、人の心にかなわなければ神の心にもかなわない。神の心にかなわなければ人の心にもかなわない。

49　人が人を助けるのが人間である。人間は、子供がころんでいるのを見て、すぐに起こしてやり、また水に落ちているのを見て、すぐに引き上げてやることができる。人間は万物の霊長（れいちょう）であるから、自分の思うように働き、人を助けることができるのは、ありがたいことではないか。牛馬その他の動物は、わが子が水に落ちていても引き上げることはできない。人間が見ると、助けてやれる。牛馬や犬猫の痛い時に人間が介抱（かいほう）して助けてやることは、だれでもあろう。人間は病苦災難の時、神や人に助けてもらうのであるから、人の難儀（なんぎ）を助けるのが人間であると心得て信心をせよ。

50　わが身はわが自由にならないものである。

51　障子一重（しょうじひとえ）がままならない人の身である。

52　人間を軽く見るな。軽く見たらおかげはない。

53　どの宗教を信じていてもくさすことはない。みな、天地金乃神のいとし子である。あれこれと宗教が分かれているのは、たとえば同じ親が産んでも、大工になる子もあり左官になる子もあり、ばくちを打つ子もあり、商売好きな子もあるというようなものである。宗教が分かれているといっても、人はみな神の子で、それぞれに分かれているのである。そばの好きな者や、うどんの好きな者があり、私はこれが好きだ、わしはこれが好きだと言って、みな好き好きで成り立っているのであるから、くさすことはない。

54　人のことをそしる者がある。神道はどう、仏教がこうなどと、そしったりする。自分の産んだ子供の中で、一人は僧侶（そうりょ）になり、一人は神父になり、一人は神主になり、また、役人になり、職人になり、商人になりというようになった時、親は、その子供の中でだれかがそしられて、うれしいと思うだろうか。他人をそしるのは、神の心にかなわない。釈迦（しゃか）もキリストもどの宗祖も、みな神のいとし子である。

55　生きている間も死んだ後も天と地はわが住みかである。生きても死んでも天地のお世話になることを悟（さと）れ。

56　お天道（てんとう）様のお照らしなさるのもおかげ、雨の降られるのもおかげである。人間はみな、おかげの中に生かされて生きている。人間は、おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである。

57　生きている時だけ天地金乃神のお世話になるように思っている者もあるが、死んでもお世話にならなければならない。魂（たましい）は神からお下げくださったものであるから、天からお暇（ひま）が出たら、また神のおひざもとに納まり、体は地から生じたものであるから、地に納まってお世話にならなければならない。

58　神のおかげで生まれてきた人間であるから、死ぬのも神のおかげでなくて死ねるものか。そうであるから、生まれたのがめでたいなら、死んで神になるのは、なおのことめでたいではないか。死ぬのがつらいと言うのは、まだ、死ぬのをいとわないだけの安心ができていないからである。信心して、早く安心のおかげを受けておかなければならない。神のお計らいでは、いついくかも知れないのに、その際のうろたえ信心では間に合わない。平生から、まさかの折にうろたえないだけの信心をしておかなければならない。

59　みな、神の分け御霊（みたま）を授けてもらい、肉体を与（あた）えてもらって、この世へ生まれて来ているのである。そうしてみれば、この世を去るのに苦痛難儀（なんぎ）をするのは、人間の心からのことである。神からお授けくださった体がこの世を去る時、痛いかゆいがないよう、ただ年病みのゆえというように長生きをし、孫子（まごこ）まで見て、安心して死ぬのが、神の分け御霊をいただいている者のすることである。金光大神の教えを守れば、末を楽しみ、安心してこの世を去ることができるから、若い時に信心して元気に働いておいて、そのようなおかげを受けるがよい。

60　死ぬ用意をするな。生きる用意をせよ。死んだら土になるのみ。

61　寿命（じゅみょう）のない者にも寿命をお授けくださる。それなのに、中には、死ねばくつろげるのにお迎（むか）えが来ないなどと、わが身から覚悟（かくご）をし、命を縮めるようなことを言う。愚（おろ）かなことではないか。死ななければくつろげないくらいの人なら、死後も安楽はおぼつかない。

62　金光様に、「世間では、死んだ後に地獄（じごく）へ行くとか極楽へ行くとか、いろいろに申しますが、いったい、人間は死んだ後どこへ行くのでしょうか」とお伺いしたら、「金光大神もまだ修行中で、死んだ後のことまではわからないが、この世に生きて働いている間に、日々安心して正しい道さえ踏（ふ）んでいれば、死んだ後のことは心配をしなくてもよい」と仰せられた。

63　「金光様、宗教がたくさんあっていろいろの教えがありますが、死んだら、魂（たましい）はいろいろに分かれるのでしょうか」と伺った。金光様は、「そういうことはありはしない。死んだ者の魂は、天地の間にふうふうと、ぶゆが飛ぶように遊んでいるので、どこへ行くものでもない。わが家の内の霊舎（れいしゃ）にいるし、わが墓所に体をうずめていることからすれば、墓所と霊舎とで遊んでいるのである。この世で生きている間に、人に悪いことをしたり、神のみ心にかなわないことをしたりすると、死んでからでも、魂は神のおとがめを受けるのである」と仰せられた。

64　先祖代々からのご無礼があっても、食べる物の初穂（はつほ）を供えて、お断りを言えば許してくださる。道の立たない御霊（みたま）でも、願えば道を立ててくださる。何事も失態のないように、成就するようにと、天地金乃神にすがればよい。

65　死ぬというのは、みな神のもとへ帰るのである。魂（たましい）は生き通しであるが、体は死ぬ。体は地から生じて、もとの地に帰るが、魂は天から授けられて、また天へ帰るのである。死ぬというのは、魂と体とが分かれることである。

66　金光大神が、「死ぬことはどういうものでありましょうか」と神におたずねしたところ、「死ぬのは寝入（ねい）っているのと同様である。死ぬことをいとうな」と仰せられた。

67　若死にをすると、みな嘆（なげ）いて心を苦しめるが、稲（いね）にも、早稲（わせ）、中手（なかて）、晩稲（おくて）とあるようなもので、早く死んでも、子供ができてから死ぬのは、早稲のようなものである。まだ子のないのに死ぬのは、実らない白穂（しらほ）になったのと同じである。死ぬということは、もみを臼（うす）でひいた時、殻（から）と実とが分かれるようなものである。時が来れば魂（たましい）と体とが分かれるのである。

68　人間は生き通しが大切である。生き通しとは、死んでから後、人が拝んでくれるようになることである。

69　人間は万物の霊長（れいちょう）であるから、死んだ後、神にまつられ、神になることを楽しみに信心せよ。

70　人間は、天地の間に生きておりながら、そのおかげを知らない。神仏の宮寺（みやてら）も人間の家屋敷（いえやしき）も、みな神の地所である。そのわけを知らないで、方角日柄（ひがら）ばかり見て無礼をし、前々からの巡（めぐ）り合わせで難を受けている。

71　今は学問の世の中で、理屈（りくつ）はよく言うようになったけれども、天地と神との恩義をしだいに知らないようになったから、難儀（なんぎ）がしだいに多くなっている。

72　今は人代（にんよ）と言って、わが力で何事もしている。神が知らせてやることにそむく者がある。神の教えどおりにする者は神になる。昔は神代（かみよ）といい、今は人代である。神代になるように教えてやる。難儀（なんぎ）になるのもわが心、安心になるのもわが心からである。

73　この大地もその他の物も、みな神の物であるのに、わが物である、わが金ですると思い、神にお願いしないでするから、叱（しか）られるのは無理もない。家を建てるにも、神にお願いして、神のお土地をお借りし、今までの無礼をおわびして建てればさしつかえない。

74　人間は勝手なものである。生まれる時には日柄（ひがら）の良し悪（あ）しも何もいわないで出てきていながら、真ん中の時だけ何のかのと勝手なことを言って、死ぬ時には日柄も何も言わないで駆（か）けっていってしまう。

75　人を殺さないと言っても、心で人を殺すのが重大な罪である。人を鉄砲（てっぽう）でうったり、刀で切ったりしなければ、私は人を殺してはいないと言うが、それは目に見える。目に見えない心で人を殺すことが多い。それが神の心にかなわないことになる。目に見えて殺すのは、お上（かみ）があってそれぞれの仕置きにあうが、心で殺すのは神がおとがめになる。心で殺すとは、病人でも、これは大病でとても助からないなどと言うが、これが心で殺すことになる。人間の心では、助かるか助からないか、わかりはしないであろう。また、あの人は死ねばよいと言ったりもする。それがみな心で殺すのである。そうではなく、どうぞ向こうが改心しますようにと、神に祈念してあげよ。

76　人の心は移り変わりやすいものである。人を頼りにするから、腹を立てたり物事を苦にしたりすることになる。人に向かう心を神に向けよ。神は、願えば何でも聞き届けてくださる。

77　人間が利口過ぎると、せっかくこうむっているおかげを取りはずすことがある。知恵が走り過ぎて、神の上を行くからであろう。

78　勝手な欲を出すな。勝手なことをしてはいけない。みな我欲なことをするから、困ることになる。

79　世の中で一番汚（きたな）いのは欲である。

80　用心せよ。わが心の鬼（おに）がわが身を責める。

81　金光大神が天地金乃神からおかげを受けていることを話にして聞かせるのである。疑って聞かないものはしかたがない。かわいいものである。また時を待っておかげを受けるがよい。めいめいに子をもって納得せよ。親の言うことを聞かない子が一番つまらない。言うことを聞かない子は、親もしかたがなかろう。

82　世の中で疑いが一番悪い。神に任せて、一心に信心をせよ。任せたうえは、神がよいようにしてやる。疑いを放すという心一つで、おかげをいただくのである。

83　信心していても、おかげが遅（おそ）い、まだかまだかと思ってうろたえて、真（まこと）の心が大事であるということを知らない。神にお頼みして、一週間たっても治らなければ、まだ治らない、おかげはないと言って神を恨（うら）む。三年、五年、医者にかかり薬をのんで、まだ治らなくても、医者には不足を言わないで、また頼みすがっていく。神はお気の毒なものである。

84　ご無礼である、お粗末（そまつ）であるというが、商売人がはかりの目盛りをごまかしたり、人の目をくらましたり、農業する人が山や田畑の境目を勝手に動かしたり、水や食べ物を粗末にしたり、自分の勤めをおろそかにしたりするほど無礼はない。人の目をくらまして得をしようとするから、損をしてたおれる。境目を欲張るから、その田畑を放さなければならないようになる。食べ物を粗末にするから食べられないようになる。勤めをなおざりにするから仕事は逃げ、働けないようになる。みな、無礼粗末の心がもとでそうなるのである。

85　信心する人は、めぐりを取り払（はら）ってもらっているのであるが、信心しないで、うかうかと暮（く）らす人は、めぐりを積んでいるのである。

86　どのような大きなめぐりがあっても、信心によって取り払（はら）ってもらえる。先祖からのめぐり、祟（たた）りは、神が道のつくようにしてくださる。

87　神に、めぐりを取り払（はら）ってくれと頼むから、取り払ってやろうとすると、人間はあまりに痛いから、よろしいと逃げる。神も、せっかく出した手を引っこめてしまう。

88　病気で死んだというが、体は死んでも病気は後々の者へ残ることがある。信心すれば、悪い種を切ってやる。

89　父母に孝行が第一である。孝行をすれば末で幸せになる。不孝をすれば末で巡（めぐ）ってくる。

90　今、天地の開ける音を聞いて、目を覚ませ。

91　日に日に生きることが信心である。

92　しんじんとは、信の心ではない。金光大神は、しんじんを神人と書く。

93　信心をせよ。信心とは、しんはわが心、じんは神である。わが心が神に向かうのを信心という。御徳の中にいても、人間に信がなければ、おかげはない。

94　信心して神になることを金光大神が教えてやる。

95　天地金乃神は天地を一目（ひとめ）に見とおし、守っておられる。人間は神の氏子、神のおかげを身いっぱいに受けるように、この身この心を神に向けて信心せよ。何事も無礼と思わないで一心に取りすがっていけば、おかげが受けられる。枯（か）れ木にも花が咲（さ）くし、ない命もつないでいただける。わが身におかげを受けて、難儀（なんぎ）な人を助けてあげよ。

96　人間が神と仲よくする信心である。神を恐（おそ）れるようにすると信心にならない。神に近寄るようにせよ。

97　信心はたやすいものであるが、みな人間からむずかしくする。三年、五年の信心では、まだ迷いやすい。十年の信心が続いたら、われながら喜んで、わが心をまつれ。日は年月のはじまりであるから、その日その日のおかげを受けていけば立ち行くことができる。たやすく信心をせよ。

98　何事もくぎづけではない。信心もめいめいにしていなければ長く続かない。

99　信心に連れはいらない。ひとり信心せよ。信心に連れがいれば、死ぬにも連れがいるであろう。

100　信心は日々の改まりが第一である。毎日、元日の心で暮（く）らし、日が暮れたら大晦日（おおみそか）と思い、夜が明けたら元日と思って、日々うれしく暮らせば家庭に不和はない。

101　生きている間は修行中である。

102　的（まと）なしの信心を授けておく。一心を定めて、いただくがよい。おかげは受け勝ち、守（まも）りは受け得。おかげを受けたら、ご恩を忘れてはならない。

103　信心するという心におかげはない。信心させていただくという心におかげがある。

104　神を信じる者は、何をするにしても遊ばせていただくのである。広前の奉仕（ほうし）で遊ばせていただき、商売でも農業でも遊ばせていただいているのである。みな天地の間にうれしく、ありがたく遊ばせていただいているのである。

105　信心は本心の玉を磨（みが）くものである。

106　玉磨（みが）かざれば光なし、光なければ石かわらのごとし、と言われているが、信心する者は本心の玉を磨かなければならない。鉄でも磨けば銀のように見える。金銀も磨かなければ光らない。人間は万物の霊長（れいちょう）であるから、本心の玉を磨いて、何事にも心がけをよくしなければ、自分は信心していると思っていても、人はそう見て敬ってはくれない。それは、身勝手な信心というほかない。

107　真（まこと）の道をいく人は、肉眼をおいて心眼を開けよ。

108　わが心でわが身を生かすこともあり、殺すこともある。

109　おかげを受けられるか受けられないかは、わが心にある。わが心さえ改めれば、いくらでもおかげは受けられる。

110　信心は大きい信心がよい。

111　心は広く持っておれ。世界は広く考えておれ。世界はわが心にある。

112　信心するものが、喜ばない、つらい顔をして日を過ごしてはならない。天地の親神を信心するのであるから、天地のような広い心にならなければならない。

113　「今月今日で一心に頼めい　おかげは和賀心（わがこころ）にあり」という見識を落としたら世が乱れる。神のひれいもない。親のひれいもない。

114　父も私も気性が荒（あら）く、いつも意見が合わなかった。その時も何かのことで争い、参拝したところ、金光様は天地書附（てんちかきつけ）をくださり、「おかげは和賀心（わがこころ）にあり」について、「和はやわらぐで、賀は祝賀の賀である」とご理解をしてくださった。

115　信心する人は何事にも真心（しんじん）になれよ。

116　手や口は手水鉢（ちょうずばち）で洗っても、性根（しょうね）は何で洗うのか。実意丁寧（じついていねい）の真（まこと）でなければ洗えまい。

117　拝めとも何をせよとも言わない。ただ一つ真（まこと）の信心をせよと言うのに、その一つができないのか。

118　心配りする心で信心をせよ。

119　信心も手習いも同じこと、一段一段進んでいくのである。にわかに先生にはなれない。

120　何事でも、千日の辛抱（しんぼう）をしなければ一とおりの修行は積めない。信心も、千日の信心が続けば、だいぶありがたくなる。しかし、おかげを落とす者ができだすのも、このころからである。信心は、一年一年ありがたくなってくるのでなければ本当ではない。

121　信心は、年をとるほど位（くらい）がつくものである。信心をすれば一年一年ありがたくなってくる。

122　神を信じる者は多いが、神に信じられる者が少ない。

123　神を使って、神に使われることを知らない。

124　昔から、あの人は神様のような人である、仏様のような人である、人に悪いことをしない正直者であるといわれる者でも、だんだん不幸なことが重なったりして、どういうわけであろうかというが、みな、神に無礼粗末（そまつ）があるからである。いくら人に悪いことをしない正直者でも、信心しなければ神には無礼粗末になる。人がよいのと神への無礼とは、また別ものである。信心しなければ、いくら善人でもおかげにはならない。

125　どんなによい料理屋が隣（となり）にあっても、その料理屋のごちそうを食べたことのない人は味を知らない。料理屋のごちそうは食べなくてもよいが、金光大神が話している天地金乃神のおかげは、受けないわけにはいかない。また、多くの人の中には、私は天地金乃神を拝まないがそれでもさしつかえはない、と言う人もある。これは恩を受けて恩知らずというものである。

126　物事のわからない無茶な者でも、信心していると、打って変わってよくなってくる。それというのは、信心すれば物の道理を聞かされ、道理をわきまえてくるからである。神の道に入れば、ひとりでに人の道を踏（ふ）むようになるが、人の道をわきまえていると言う者の中には、神の道をわきまえない者がある。

127　大正直の人と悪心の人は、よくおかげをいただく。中くらいの人は熱心さがうすく、おかげが少ない。

128　真（しん）にありがたいと思う心は、おかげのはじめである。

129　だれでも、不幸災難に遭（あ）って困りきっている時に助けてもらったのは、この恩、このおかげを一生忘れられるものかと言うが、日に日に授かっているおかげは、案外知らないでいる。神のおかげは、生きているから死んだからではない、いつも受け通しである。

130　信心していれば、目に見えるおかげより目に見えないおかげが多い。知ったおかげより知らないおかげが多い。後で考えてみてはじめて、あれもおかげであった、これもおかげであったということがわかるようになる。そうなれば本当の信者である。

131　みな、おかげをくださいと言うが、果たして本当のおかげを知っているのか。自分の思うとおりを聞いてくださるのがおかげとは限らない。死んでおかげの者もあり、命をつないでもらっておかげの者もある。すべてこの世のことは天地金乃神のご支配であるから、神に任すよりほかはない。信心していれば、その時は都合が悪いようでも、神の仰せにそむかないでいると、後になってから、あれもおかげであった、これもおかげであったということがわかってくる。これがわかるくらいの信心をしなければ、信心するかいがない。

132　広大なおかげというが、おかげとはめいめいの真（まこと）に映る影（かげ）のことであるから、神に大きな真を向けてみよ、大きなおかげがわが身にいただける。小さな真で大きなおかげはもらえない。影は形に添（そ）うと決まったものである。

133　おかげはたらいの水である。向こうへやろうとすれば、こちらへ来る。こちらへ取ろうとすれば、向こうへ行く。

134　無常の風は時を嫌（きら）わないというが、金光大神は、その無常の風に時を嫌わせてやる。病気の程度に合わせて生きるか死ぬかの見立てをするのは、医者である。これでは生きられないと、医者が手を切ったら、死ぬのである。そのように医者が手を切った者でも、天地金乃神のおかげをいただいて助かったら、無常の風が時を嫌ったことになるであろう。

135　神の心にかなった者が少ない。財産と人間と健康とがそろって三代続いたら、これが神の心にかなったのである。神の心にかなわないと、財産もあり力もあるが、健康でない。健康で賢（かしこ）くても財産をなくすことがあり、また大切な者が死んで、財産を残して子孫を絶やしてしまう。神のおかげを知らないから、互（たが）い違（ちが）いになってくる。信心して神の大恩を知れば、無事健康で子孫も続き財産もでき、一年まさり代まさりのおかげを受けることができる。

136　めでためでたの若松様よ、枝も栄える葉も茂（しげ）る、というではないか。金光大神は子孫繁盛（はんじょう）、家繁盛の道を教えるのである。

137　先の世まで持っていかれ、子孫までも残るものは神徳である。神徳は、信心すればだれでも受けることができる。神徳は尽（つ）きることがない。

138　神徳を受けよ、人徳を得よ。

139　神徳は、人間心（ごころ）の位（くらい）も思わず、理屈（りくつ）も言わず、学問のうぬぼれ心もなく、清い一心さえあれば、受けられる。

140　金光大神は参ってたずねる所がなかった。あなた方はおかげを受けて遠路のところを参って来るが、信心して徳を受けて、身しのぎをするようになれ。

141　徳のないうちは心配する。神徳を受ければ心配はない。

142　「私は病身で、長生きはできないような気がしてなりません」と申しあげると、金光様は、「人の命は人間の考えではわからない。神は向こうあけ放しであるから、信心して神徳を積んで、長生きをするがよい」とみ教えくださった。

143　信心して徳を積み、神から徳を受けた人は、慎（つつし）みが第一である。常に慎みをしても、死に際（ぎわ）に不足の心が出ては、せっかく受けた徳を失うことになる。信心して徳を受けた者は、平素の慎みも大切であるが、死に際の慎みも、また格別大切である。必ずその時に徳を落とさないようにせよ。

144　神参りをするのに、雨が降るから風が吹（ふ）くからと、大儀に思ってはならない。その辛抱（しんぼう）こそ、身に徳を受ける修行である。

145　参拝するのに手間がかかる、暇（ひま）がかかると思ってはならない。それだけの手間暇は、神がすぐに取り返させてくださる。

146　みな、忙（いそが）しいからなかなかお参りができませんと言う。無理に忙しい時に参れと言うのではないが、おかげを受けていれば暇（ひま）な日という日があるものか。今日は雨が降ったからお参りしよう、今日は休みだからおかげを受けようと、暇をつくって参り、おかげを受けるがよい。

147　信心は手厚くせよ。わが家で信心しておりますと言うのは、信心の抜（ぬ）けはじめである。

148　たびたび参って来なくてもよい。参って来ても、金をこれだけ使った、これだけあればあのことができたのにと思うようでは、神に心配をかけるようなものである。神は親であるから、子がお金の心配をするのは、かわいそうに思われる。無理にたくさんのお金を使って参らなくても、わが家で信心しても守ってくださる。

149　参るな、参るなと言っても、参らないとおかげは受けられない。金光大神が参るなと言うのは、参ってもおかげを受けなければ、足がくたびれたり大切なお金を使ったりするだけで、参って来る者が困ることになる。それで、参るなと言うのである。

150　私一人が参った時には、金光様は、「たびたびよく参って来るなあ。参って来れば、来るだけのおかげがあるからなあ」と言われた。しかし、大勢連れだって、途中（とちゅう）、船の渡し賃を払（はら）わなかったり、ひばりを捕（と）るようなことをして参った時には、「遠方を参って来なくても、わが家で壁（かべ）でも拝んでおくがよい」と仰せられた。

151　参って来なさいとは言わないが、たびたび参った人は、たびたび参っただけの神徳はいただけるであろう。たとえば、学校へ長く行った人は、何かと知っていることが多い。たびたび参って来る人は、金光大神の話を聞き覚えて、何かと知ることがあろう。また、たびたび参っても、自分の思うことを頼み、帰ることを急ぐ人は、勝手な信心で、金光大神の話すことは何もわからないであろう。

152　よく、ちょっと前を通りましたからついでに参らせてもらいましたと言って、上がり口で拝んで帰ろうとする者があるが、ついでに参るからおかげがついでになる。同じように前を通ったのでも、わざわざここまで寄って参らせてもらったという心で、神前へあがって拝礼をしてみよ。神はわざわざのおかげをくださる。

153　痛い時はお願い参り、痛くない時が信心参り。

154　参る者のほとんどはお願いに参るのに、あなたは、いつもおかげを受けているお礼に参って来る。神も満足に思う。おかげを受けてお礼に参って来ると、神も喜び、金光大神もひときわうれしいが、本人もうれしいであろう。人間がおかげを受けて喜ばないと、神も喜べない。

155　広前は信心のけいこをする所であるから、よくけいこをして帰れ。夜中にどういうことがないとも限らない。おかげはわが家でいただけ。子供がある者や日雇（ひやと）いの者は、わが家を出て来るわけにはいかない。病人があったりすれば、それをほうっておいて参って来ることはできないから、家族中が健康な時に、ここへ参って来て信心のけいこをしておけ。

156　願うことは、何事もかなわないということはない。金光大神の手続きをもって願え。何事もおかげがいただける。

157　神の広前を勤める者は、神の守（も）り、神の前立ちである。神のお手代わりである。

158　神の取次は神がする。真（まこと）の信心がある者は神である。そうであるから、神の取次ができるのである。狐や蛇（へび）や鳥などに、どうして神の取次ができようか。何の神は狐が使わしめ、何の神は蛇が使わしめなどと、いろいろなことを言う人があるが、天地金乃神は、神の子である人をもって使いとなさる。

159　神が天地の理を説いて、安心の道を授けてやる。

160　金光大神の道は祈念祈祷（きとう）で助かるのではない。話で助かるのである。

161　ここへ参っても、神の言うとおりにする者は少ない。みな、帰ってから自分のよいようにするので、おかげはない。神の言うことは道に落としてしまい、自分勝手にして、神を恨（うら）む者もある。神の一言（ひとこと）は千両（りょう）の金にもかえられない。ありがたく受けて帰れば、船にも車にも積めないほどの神徳がいただける。心の内を改めることが第一である。

162　差し支えのないように仕事を早くすませたり、仕事のくり合わせをつけておいて参って来て、話を聞いて信心の勉強をするのである。そうすると、ひとりでにおかげが受けられるようになる。

163　信心は話を聞くだけでは十分でない。わが心からも練り出すがよい。

164　いくら学問がある、よく理屈（りくつ）がわかっているといっても、神信心のことは、わかっただけでは役に立たない。わが心に食いこんで、事にあたって実際に出てこなければ、神の徳はいただけない。

165　神は昼夜も遠い近いも問わない。頼む心にへだてなく祈れ。

166　神を拝礼するのに、別に決まりはない。実意丁寧（じついていねい）、正直、真（まこと）一心がかなめである。日々生かされているお礼を申し、次に、お互（たが）い凡夫（ぼんぷ）の身で、知らず知らずにご無礼、お粗末（そまつ）、お気障（きざわ）りなどをしている道理であるから、それをお断りおわび申して、それがすんだら、身の上のことを何かと実意をもってお願いさせてもらうがよい。

167　信心といっても別にむずかしいことはない。親にものを言うように、朝起きたら神にお礼を申し、その日のことが都合よくいくように願い、よそへ行く時には、行ってまいりますと言ってお届け申しあげよ。そして、帰って来たら、無事で帰りましたとお礼を言い、夜寝（ね）る時にはまた、その日のお礼を申して寝るようにすれば、それで信心になる。

168　神を本気で拝むには、拍手（かしわで）を打って神前に向かったら、たとえ槍先（やりさき）で突（つ）かれても後ろを振（ふ）り向いてはならない。物音や物声を聞くようでは、神に一心は届かない。

169　いかにありがたそうに拝みことばを唱えても、心に真（まこと）がなければ神にうそを言うのと同様である。拍手（かしわで）も、無理に大きな音をさせるにはおよばない。小さい音でも神には聞こえる。拝むにも、大声を出したり節（ふし）をつけたりしなくても、人にものを言うとおりに拝め。

170　はじめは、お祓（はらい）を一週間に一万回も唱えていたが、後、そのことを金光様にお話し申しあげたところ、「拝み信心をするな。真（まこと）でなければいけない」と言われた。また、「神を拝むのに手や口を洗っても、心を洗わなければ何にもならない。心は火や水では洗えない。真一心で心を洗って信心をせよ」とも教えてくださった。

171　手を洗ったり口をすすいだりしなければ信心はできないことはない。農作業をしていて、肥料をあつかっている間に事が起こった時、手を洗ったり口をすすいだりしていては間に合わない。そうしたときには、すぐそのまま拝礼してお頼み申せばよい。

172　天地の間に住む人間は神の氏子である。身の上に痛みや病気があっては、家業ができがたい。身の上安全を願い、家業出精（しゅっせい）、五穀成就、牛馬にいたるまで、身の上のこと何事でも、実意をもって願え。

173　大きなことはお願いし、このくらいは構わないということはない。神には、大きいこと小さいことの区別はない。何事にも神のおかげをいただかなければならない。

174　病気にでもなると、だれでも人には話すが、神に申しあげることはしない。人には言わなくても神に申しあげてお願いすれば、おかげが受けられる。拝み方は知らなくても、一心にすがればおかげをくださる。

175　願い事があると、遠方からわざわざ参って来て頼む人が多い。人を頼むにはおよばない。真（まこと）の信心をして、自分で願っておかげをいただけ。人を頼まなければ、おかげがいただけないとすれば、取次をする者のそばにつききりでいなければなるまい。神はそういうものではない。自分で願って、自分でおかげをいただけ。

176　自分から日切りをして願え。一週間とか一日とか、今のことを今とお願い申して、おかげを受けよ。一度日切りをしてお願いし、おかげのしるしがなければ、重ねて願え。それでもしるしがなければ、なおもう一度と、三度までは押（お）して願え。願主（ねがいぬし）があきらめてはいけない。押して願っておかげを受けよ。

177　みな、おかげを受けるために参って来ているはずであるが、中には、神が「おかげをやろうやろう」と言われるのに、「いや、結構です」と言って帰る者もある。おかげをぜひいただかなければ帰らないという気でいる者こそ、おかげがいただけるのである。

178　商売上のことを願ったところ、金光様は、「あなたの家には病人があるのに、それをほっておいて願いもしないで、不孝な者である」と言われ、「よく考えてみると中風で動けない老人がいます」と申したら、「それをそのままにしておいてもよいか」と仰せられた。「治るでありましょうか」と申したら、「老人だからといって治らないことはない」と仰せられ、信心して全快した。

179　死んだからといって、神のおかげを受けないではいられまい。死に際（ぎわ）にもお願いせよ。

180　容赦（ようしゃ）をするな。鐘（かね）は打ち割る心でつけ。太鼓（たいこ）はたたき破る気でたたけ。割れも破れもしない。ただ、その人の打ちよう、たたきようしだい。天地に鳴り渡ってみせよう。

181　生きている者にはみな、おかげをやってある。恩を忘れるなよ。その中にも、まことのおかげを受ける者が、千人に一人もない。

182　あなた方は小さい所に気をつけて、夜分に提灯（ちょうちん）を借りても、手みやげをつけて、ありがとうと礼を言って返す。それならば、日乃神（太陽）にはどのくらい大きなお礼を申しても、過ぎることはあるまい。

183　信心する者は、山へ行って木の切り株に腰（こし）をおろして休んでも、立つ時には礼を言う心持ちになれ。

184　道で夕立に遭（あ）うと、お世話になりますと言って軒下（のきした）を借りて、雨がもうやむかもうやむかと空ばかり見ているが、小やみになると、やんだやんだと言って、ろくろく礼も言わないで出て行く。そのような信心では、おかげにならない。

185　九死（きゅうし）に一生のお願いでどうでもおかげをいただこうと、一心になっている時のように、お礼が本気で言えたらよい。願うことはすぐにできても、お礼はなかなか言えない。お願い一度にお礼十度というように、お礼を言う心が厚いほど信心が厚い。信心が厚いほどおかげが厚い。

186　「金光様、なにぶん、突然（とつぜん）にお参りをしましたので、何もお礼を持って来ておりませんが、何をお供えすれば神様がお喜びくださるでしょうか」とお伺いすると、「何もお礼を出すことはいらない。自分が受けたおかげを手本にして世の中の人を救ってあげれば、お礼になる」と仰せになった。そこで、「私のような学問も何もない者には、それはむずかしいことです」とお答えすると、「学問のある者しか神は使わないというわけではない。学問はなくても真（まこと）の徳をいただけば、さしつかえはない。自分が受けたおかげを手本にしていくのであるから、むずかしいことはない。ご用をさせていただけ」と仰せられた。

187　自分が悪かったと得心してお断りを申したら、神は叱（しか）ってはくださっても、罰（ばち）はお当てにならない。すぐにお許しくださる。神は、常に人間がかわいいとの思いでおられるのである。

188　「先祖からのご無礼がありましょうとも許してくださいませ。日々信心いたしますから、信心の徳をもって、どのようなめぐりもお取り払（はら）いくださいませ」と言って願うがよい。

189　先祖、先祖からの罪をわびよ。めぐりは、ひなたの氷のようにお取り払（はら）いくださる。

190　神の教えどおりに願って、願いどおりのおかげを受け、ありがたいと言ってお礼に供える物は、神も喜ぶ。末の繁盛（はんじょう）を守ってやる。お札（ふだ）やお守（まも）りの代金、初穂（はつほ）、益を取るなどという神とは、神がちがう。

191　金光大神は金銭を目当てに拝むのではない。難儀（なんぎ）な人を助けなければならないから、「お供えのことを思わないで、こづかいだけのくり合わせを受けられた時に参りなさい」と話しているのである。信心しておかげを受けた時に、心任せのお供えができるようになれば、供えた者も喜びであろう。

192　長者の万灯、貧者の一灯ということがあろう。その貧者の一灯も供えられない者もあろう。神は灯明でも線香でも、何でもかまわない。一本の線香さえ供えられない者は、一本を半分に折って供えても、灯明の代わりに受け取ってやる。線香も供えられない者は、切り火をして供えても、灯明の代わりに受け取ってやる。線香の灰でもおかげを受ける者がある。

193　神は供えたお金をただで取りはしない。昔から一粒万倍（いちりゅうまんばい）というであろう。大地に米を一粒（つぶ）まいてみよ、一合（ごう）になるであろう。また、年が明けてその一合をまいてみよ、一俵になろう。天地の神に供えた物は、そのようなもので、一粒万倍にして返してやる。

194　人が真（まこと）から供えるのは神にも喜ばしいが、寄付を募って人を痛めては、神は喜ばない。

195　「今日は少々寄付をしようと思って参りました。よそでは寄付札（ふだ）を立てたりしますが、こちらでは、そういうことはなさらないのですか」とお伺いすると、「あの人がいくら寄付したので、私もこれくらいしなければということになり、それがたちまち神への信心に不浄（ふじょう）を入れることになるから、いくら寄付されても、そういうことはしないのである」と仰せられた。「寄付帳とか受付とかはありませんか」と申しあげると、「はい、それもない。神へ供えられるのなら、ただ、さい銭箱に入れておかれても同じことである。金がなければ信心できないとなれば、貧乏（びんぼう）人はみな死ななければならない。私の方では、お供えする物がないと言っても、ご神米を下げるのである」と仰せられた。私は大金を持って来たので歓待されるかと思っていたが、調子はずれの話で間が抜（ぬ）けたことであった。そこで、そのお金を出して、「ご普請（ふしん）へ寄付いたしたい」と申しあげると、「はい」と言われ、ご祈念くださった。ご祈念が終わってお結界（けっかい）に下がられ、何も仰せられないでただお座りになっていた。私は心の内で茶づけでも食べよと言われるのかと思っていたが、何のこともなかった。お礼を申して帰ろうとしたら、いつものとおり、「それは、ご苦労であった」と言われただけであった。

196　お供え物とおかげは、つきものではない。

197　家族一同、仲よくして信心せよ。彼岸（ひがん）もちなどをこしらえる時に、子供がそばで、くれ、くれと言うのを、神に供える前はいけないと言って頭をたたいたりしては、神は喜ばない。先に子供にやって喜ばせておいて、それから神に供えてくれれば神は喜ぶ。招かれて行っても、台所で子供が頭をたたかれて泣いたりしていては、ごちそうを出してくれても、うれしくはないであろう。

198　農作業で忙（いそが）しい時など、ご飯を神に供えるのに、足が汚（よご）れているからと、めんどうに思って供えるのでは、神は喜ばない。それよりも、釜（かま）の中で少々かき寄せて、神様と言って拝んで、それをよく混ぜていただけ。神はそれを喜ぶ。

199　表行（わぎょう）よりは心行（しんぎょう）をせよ。

200　世の中に表行（わぎょう）をいろいろする人がある。寒行（かんぎょう）として拝んで歩いている人もあるが、心行（しんぎょう）といって、人に不足を思わないで、物事の不自由を行（ぎょう）とし、家業を勤め、身分相応を過ごさないよう倹約（けんやく）をし、だれにも言わないで行えば、これが心行である。

201　世間には、水の行（ぎょう）、火の行などがあり、いろいろの物断ちをする人もあるが、そのような行はしなくてもよい。巡礼（じゅんれい）のように白い着物を着てあちらこちらを巡（めぐ）り歩く暇（ひま）に、毎日の家業を信心の行と心得て勤め、おかげを受けるがよい。

202　水をかぶって行（ぎょう）をするというが、体にかぶっても何にもならない。心にかぶれ。寒三十日の水行（すいぎょう）をするといっても、それは体を苦しめて病気をこしらえるようなものである。家内や子供の病気のために水をかぶって、一週間日参（にっさん）をしても治らなければ、自分の体に傷（きず）がつくだけである。水をかぶったから真（まこと）である、水をかぶらないから真がないとはいえない。食わずの行をするのは、金光大神は大嫌（きら）いである。食べて飲んで体を大切にして信心をせよ。

203　「しばらくの間、山に入って修行させていただきとうございますが、いかがなものでしょうか」と申しあげると、金光様は、「山に入ったら、どのようにして修行をするのか」とたずねられた。「山に入ると、はじめは麦粉を練った団子で命をつなぎます。それをしばらく続けると、次には木の実や木の葉で生きられるようになります。またしばらくすると、ついには水ばかりで生きられるようになってまいります」と申しあげると、「いったい、どんな山に入るのか」と仰せになったので、「なるべく深い山に入って、浮（う）き世を逃（のが）れるつもりでおります」と申しあげた。金光様は、「それは結構である。しかし、何もわざわざそんな不自由な山に行かなくても、心の中に山をこしらえて、その中で修行をしたらそれでよい。自分が山に入った心になっていれば、どんなに不自由なことがあっても、また家内のこしらえたものがまずくても、けっして不足を言うことはないであろう」と仰せられた。

204　人間は人間らしくすればよい。何も求めて不思議なことをしなくてもよい。

205　座敷（ざしき）、押（お）し入れ、板の間（ま）にちりが積もるように、人間は我欲のためにわが心にちりが積もる。わが心わが身が汚（けが）れないように、心と体の掃除（そうじ）をするつもりで、今月今日で信心をせよ。

206　家を建てる時、まず神をどこにまつるかを考えて後、床（とこ）の間や座敷（ざしき）を考えるようにすれば、子孫も家も繁盛（はんじょう）する。

207　祭り日は、信心を忘れないための大切な日である。この祭り日を忘れさえしなければおかげがある。忘れたらおかげはない。親の恩を忘れないための法事のようなものである。何事にも恩を忘れてはならない。

208　御霊（みたま）の祭りは大切にせよ。

209　木のもとへ肥料をやれば、枝振（えだぶ）りまで栄える。先祖や親を大切にすれば繁盛（はんじょう）させてくださる。

210　分家をすると、うちにはまつる御霊（みたま）がないと十人のうち九人まで言うが、それは大きな間違（まちが）いである。人にはみな先祖というものがある。押（お）し入れのはしにでも、先祖様と言ってまつらなければならない。

211　何事にも、自分でしようとすると無理ができる。神にさせていただく心ですれば、神がさせてくださる。

212　信心をしても、何もかも捨ててとびこんでしまうような信心をするな。茶づけでも食べているような心持ちで信心せよ。節（ふし）のあるところで、あわててのこぎりをひくと、のこぎりの歯が折れる。

213　ふだんから、神に取りすがっていれば、神と心安くならせてもらっているのと同様である。無理も聞いていただける。大難は小難にまつりかえてくださり、小難は無難にお取り払（はら）いくださる。

214　「信心する者は、いつも、心にみきを供えて祈れ。いっさいの願い事を成就させてやる」と金光様が教えてくださった。信心する者は、これを忘れてはならない。みきというのは、ありがたき、恐（おそ）れ多き、もったいなきの三つのきである。信心する者の心からこの三つのきが抜（ぬ）けたら、おかげは受けられない。

215　ふだんはふだんでおかげを受けなければならないが、いざという時にはなおのことおかげを受けなければならない。どのような時にでも置き場を忘れて探し回ることのないように、信心の心は肌身離（はだみはな）さず持っていないと、用心が悪い。いざという時には裸（はだか）でも、田んぼの中でもよい、「金光様、お願いします」と頼めば、すぐおかげをくださる。

216　人を頼むにも、日常心安くしておかないと間に合わない。神も、常日ごろの信心がなければ、いざという時に間に合わない。

217　「世の中には強欲非道な人間でも不思議におかげをいただくことがありますが、あれはどういうわけでございましょうか」とお伺いすると、「いかに性根（しょうね）の悪い人間でも、一心にその時だけ改まって信心すれば、一時はおかげを受けるものである。ちょうど、やせ地に肥料をやれば一時はできるようなもので、長続きはしない。おかげを受けた時の心を忘れないように、日に日に心を改めて信心しなければならない」と仰せられた。

218　病気災難があったからといって、にわかに信心を始めるよりは、ふだんから手厚く信心しておれ。手厚い信者であれば、神から心配してやる。いかに大病とか九死（きゅうし）とかいう病難でも、峠を越えさせて全快させてやる。とかく信心の地を肥やしておけよ。

219　手厚く信心をする者は夢（ゆめ）でもうかつに見るな。神は、夢にでも良し悪（あ）しを教えてくださる。

220　めでためでたの若松様よ、枝も栄える葉も茂（しげ）る、とめでたい時に歌うが、枝も栄え葉も茂るのは、幹が太るからである。幹が太るのは、地の中に目には見えないが、大きく根を張っているからである。もとになる根が枯（か）れると、太い幹も茂った枝葉も枯れてしまう。日々信心の根張りをよくしていると、無常の風が吹（ふ）いても、たおれることがない。おかげで枝葉も茂って繁盛（はんじょう）する。これがめでたいのである。

221　神があっての人間、人間があっての神であるから、病気災難をはじめ何事でも、非常と平常とにかかわりなく神に願いをかけよ。信心とは、常日ごろ、神の心のようになるのが信心である。手を合わせて拝むばかりが信心ではない。一心とは、一つの心と書く。二心（ふたごころ）のうろたえ心を出さないで、天地金乃神に一筋に取りすがるのが一心である。十分なおかげを受けるには、一心でなければならない。

222　これまで、神がものを言って聞かせることはあるまい。どこへ参っても、片便（かたびん）で願い捨てであろう。それでも一心を立てれば、わが心に神がおられるからおかげになるのである。生きた神を信心せよ。天も地も昔から死んだことはない。金光大神が祈るところは、天地金乃神と一心である。

223　思う念力（ねんりき）岩をもとおすというが、信心する者が一心を出して願えば、どんなことでもかなえてくださる。

224　うろたえ信心をするな。早くおかげを受けたいと思ってうろたえるのは、近道をしようと思って知らない道でうろたえるのと同じことである。金光大神の信心は大道を行くようなものである。一心になって信心せよ。

225　一心に信心すれば、おかげが受けられる。たとえて言えば、女の人でも、いよいよ一心を打ちこむ男は一人しかない。この人と思ったら、心の底から一心を出して、身も心も打ちこんでしまうのでなければ、まことの恋ではない。他の男を見下げるのでも嫌うのでもないけれど、身も心も打ちこんでいきたいのはこの人であるというのでなければならない。人にも、この人が親切であるとか、あの人が頼みがいがあるということがあろう。何事を頼むにも、一人に任すと、その人が自分のおよぶ限りの力を尽（つ）くして世話をしてくれる。二人、三人と頼むと、相談に暮（く）れて物事がはかどらない。信心もこの一心を出すと、すぐにおかげがいただける。

226　「一心になることは、はなはだむずかしいものと思います。拝みながら、いろいろのことが思われたりして、心の内が定まりませんが、どういうものでありましょうか」と申しあげると、「一心になる心は、子供をこしらえる時のようなぐあいに思い知れよ」と仰せられた。

227　天に任せよ、地にすがれよ。

228　四季の変わりは人の力におよばないことである。物事は時節に任せよ。

229　一生死なない父母に巡（めぐ）り会ったと思って、何事でも無理と思わないで天地金乃神にすがればよい。

230　金（かね）の杖（つえ）をつけば曲がる。竹や木の杖をつけば折れる。神を杖につけばよい。神は、曲がりも折れも死にもなさらない。

231　建てた柱はたおれることがある。吊（つ）ったのれんにもたれる心になっておかげを受けよ。

232　金光大神は、どうにもならない時には、じっと寝入（ねい）るような心持ちになるのである。あなた方もそういう心になるがよい。どうにもならないと思う時にでも、わめき回るようなことをするな。じっと眠（ねむ）たくなるような心持ちになれ。

233　何事にも無理をするな。我（が）を出すな。わが計らいを去って神任せにせよ。天地の心になっておかげを受けよ。

234　天地金乃神は天地を一目（ひとめ）に見ている。神は平等におかげを授けるけれども、受け物が悪ければおかげが漏（も）れる。神の徳を十分に受けようと思えば、ままよという心を出さなければおかげは受けられない。ままよとは、死んでもままよのことである。

235　わが子の病気でも、かわいい、かわいいと思ってうろたえてはいけない。言うことを聞かない時にも、ままよと思ってほうっておくような気になって信心をしてやれ。おかげが受けられる。

236　いかなる大しけの時でも、金光大神を頼んで、助けてくださいと言って、船の向く方へ行かせるようにせよ。船の行かない方へわが力で進めようとするから、命を失うこともある。

237　信心していても、よいことばかりはない。悪いこともある。手にでも、表と裏とがあるようなもので、裏の出た時には、早く表の出るようにおかげを受けよ。

238　信心しているからといっても、みなの身の上のことが何もかも同じになるとはいかない。山の木が三十年たっている、五十年たっているといっても、同じような木ばかりはない。ある人は信心しないのに金持ちになることもあるし、信心してもなれないこともある。米麦を作っても、実のない白穂（しらほ）もできるし病気の黒穂（くろほ）もできる。そのように、全部同じようにとはいかないので、心を広く持って信心しなければならない。

239　人間はみな、生まれる時に約束（やくそく）をしてきているのである。だから、家族が一人よりは二人、二人よりは三人、三人よりは五人と大勢いるほど、家庭の中にさまざまな難儀（なんぎ）がある。幸いに信心をしていると、それを除いていただけるが、生まれたときの約束であるから、またこういうことが起きたというようなことが出てくるかも知れない。その時に、これほど信心するのに、なぜこういうことが出てくるのだろうかと思えば、もう信心はとまっている。これはまだ私の信心が足らないのだと思い、これはどこまでも私の勤めるべき役であると思って、信心をしていかなければならない。そこからおかげがいただける。

240　生まれた者には死ぬということがあり、死に方にもいろいろある。稲（いね）や麦にたとえて話せば、春、もみを苗代（なわしろ）にまき、本田に植えつけ耕作しても、稲は白穂（しらほ）、麦は黒穂（くろほ）になることがある。子供が成長し、結婚し、その本人に子供のできないうちに死んだのは、白穂黒穂のようなものとあきらめるほかない。また、早稲（わせ）、中手（なかて）、晩稲（おくて）などの種類に分けてあるが、人間にも短命長命の別があり、途中死（とちゅうじ）にという難儀（なんぎ）なこともある。その時、子供が後におれば、相続する人があるので早稲のようなものであると悟（さと）りを開いて、あきらめるほかない。万事におくり合わせをこうむるよう神に頼み、先を楽しむ信心をせよ。

241　子供が死んでも、おかげがなくて死んだというような不足を神へ向けてはならない。先祖代々私どものめぐりでこういうことになりましたと、お断りを申すようにせよ。

242　信心する者は驚（おどろ）いてはならない。これから後、どのような大きな事ができてきても、少しも驚くことはない。

243　心配する心で信心をせよ。

244　心配が増したり、物事を苦に病むようになるのは、信心が落ちた証拠（しょうこ）である。その時、これをありがたく思って信心すると、これが修行になって、また一段と信心が進んでいく。そうでないと信心が落ちてしまって、心配や苦難に負けて、どうにもならないようになってしまう。

245　人間であるから、生きている間は先々のことを考えもしようし、心配の尽（つ）きる時はあるまいが、それがみなおかげになれば、心配はあるまい。心配は、信心すればみなおかげになる。心配は体に毒、神に無礼である。心配する心を神に預けて、信心する心になれよ。おかげになる。

246　明日塩辛（しおから）を食べるからといって、今日から水を飲んで待つわけにはいくまい。取り越（こ）し苦労をするな。

247　信心をしていれば神と心安いのと同じであるから、大難は小難に、小難は取り払（はら）いのおかげをやる。これほど信心をしても、まだこのような難を受けると言うのは、真（まこと）の神徳を知らない者の言うことである。難は人間には計り知れないものである。熱心に信心している者でも、難が強く信心をやめる者がある。信心をして難の根の切れるおかげを受けなければならないのに、難の根よりも先に信心の根を切るのは、やはり真の神徳を知らない者のすることである。信心する者は、真の神徳を知らなければならない。

248　人間は、生まれる時に証文を書いてきているようなものである。生まれた時に、悔（く）やみを言いに行ってもよいくらいのものである。どういう災難があるとか、こういう不幸があるとかいうことは、決まっているのである。神はよくご承知なのである。信心を強くすれば、大厄（たいやく）は小厄にしてくださり、小厄はお取り払（はら）いくださる。それが、おくり合わせをいただくということである。

249　大厄（たいやく）は小厄におまつりかえを、また、小厄はお取り払（はら）いをお願いせよ。物にたとえれば、たらいにいっぱいためた水を屋根の棟（むね）から少しずつ流してみよ。これが小厄のたとえである。それをどっと流すのが、大厄のたとえである。信心して、大厄は小厄にしてもらい、小厄はお取り払いいただけば、後は繁栄（はんえい）をいただける。

250　信心しながらも、次々に不幸せが重なると、「何かのしわざではないでしょうか。何かの罰（ばち）ではないでしょうか」と言って参る者があるが、どうして、神がかわいい子に罰をお当てなさろうか。心得が違（ちが）っている、気をつけよ、とお気づけがあるのであるから、今までとは心を改めて信心をすれば、不幸せがおかげになってくる。

251　信心が厚くなるほどお試しがある。お試しがあるのはおかげである。

252　悪いことを言って待つなよ。先を楽しめ。

253　悪いことを思い出して苦にするな。今日（こんにち）が大切である。先を楽しめ。

254　若い時の信心は、老いての楽しみである。

255　何事も辛抱（しんぼう）が大切である。信心においてはなおさらのこと、辛抱が弱くてはおかげが受けられない。中には、やけを起こして信心をやめる人がある。気の毒なことである。車でも心棒が弱ったり折れたりしたら、車が回らない。辛抱をしないで幸せを得た者は、あまりない。漁師でも農民でも商人でも、辛抱のない者は出世ができない。漁師や農民には風雨の天災があり、商人は損をしたりして、不幸せなことがある。それを辛抱していかなければ、幸せにはなれない。信心するにも辛抱が大切である。その証拠（しょうこ）には、神殿のお扉（とびら）を開いてみよ。ご幣（へい）か、み鏡のほかは何もない。ただただ、信心の辛抱でおかげが出るのである。神からおかげが出ると思わないで、信心からおかげが出ると思って、信心の辛抱を強くせよ。

256　桜（さくら）の花の信心より、梅（うめ）の花の信心をせよ。桜の花は早く散る。梅の花は苦労しているからすぐには散らない。

257　信心をしていても、なぜおかげがないのであろうかと思ってはならない。たとえば、麦をまいて肥料をやっておいても、正月ごろには、肥料をやらないのとまったく変わらないが、春先になると、肥料をやったのはずっと伸（の）びてくる。信心もそのとおりであるから、怠（おこた）らないで、一筋の心でせよ。

258　信心をして、おかげがあるとかないとか言うけれど、十年辛抱（しんぼう）すればどんな者にでもおかげをくださる。

259　信心する人は、腹の立つことがあっても腹を立てないようにせよ。腹を立てては家の中に不和を起こすし、人とも仲違（たが）いをする。世間を見よ。後にはわが身を滅ぼす者がある。これは堪忍（かんにん）が足らないのである。堪忍は、ごく大切なものと心得よ。

260　堪忍（かんにん）はよくできても、腹の立つのをおさえこんでいるのでは気分をいためる。それでは、まだいけない。もう一つ進んで、腹の立つということを知らないようになれ。そうすれば、身の薬である。

261　信心する人は、十人の股（また）はくぐっても、一人の肩（かた）は越（こ）すな。

262　負けてこらえておれ。負ければ損をするからばからしいと思うかも知れないが、神がまた、くり合わせてやる。そして、人からもよい人と言われるようになり、身に徳がついてくる。

263　理屈（りくつ）があっても、みなまで言うな。理屈とくさびは八分詰（ぶづ）め。詰め過ぎると紙袋（かみぶくろ）は裂（さ）ける。あいよかけよで世は治まるのである。

264　信心の浅い時には、人から悪（あ）しざまにそしられるとすぐ腹が立って、こらえきれないで、しっぺ返しのようなことをする。しかし、信心が少し進んでくれば、人からそしられると、腹は立つけれども、信心しているからと思ってこらえられるようになってくる。信心がずっと進んでくると、人からそしられても腹が立たない。腹が立つどころか、かえってその人が気の毒になる。

265　堪忍（かんにん）することをよく心得ておれ。堪忍さえ強かったら人と仲違（たが）いをすることはない。「ああ、ふびんなものだ。私はこうしてこらえているが、信心する心のない者は、ああいうことを聞いては青い顔をするであろう。そういう人は、神に願って、直してもらってあげたいものだ」という気になっておれ。

266　我情我欲を放して真（まこと）の道を知れよ。

267　目先の欲を放して、先々の徳をいただけ。

268　猿（さる）も木から落ちる、弘法（こうぼう）にも筆の誤りという。木に登っても、危ない危ないと思っていると、用心するからけがはないが、少し上手になると、大胆になって大けがをしたり命を落としたりする。慢心（まんしん）は大けがのもと、健康であっても信心の油断をしてはならない。

269　坂道を九分（ぶ）どおり登って、それで安心してはいけない。その坂を登り切って向こうへおりたら、それで安心せよ。途中（とちゅう）で気を緩（ゆる）めると、すぐに後へもどる。

270　人間は、財産ができたり、先生と言われるようになると、頭をさげることを忘れる。信心して身に徳がつくほど、かがんで通れ。とかく、出るくぎは打たれる。よく、頭を打つというが、天で頭を打つのが一番恐（おそ）ろしい。天は高いから頭を打つことはないと思うであろうが、油断をするな。慢心（まんしん）が出るとおかげを取りはずす。

271　おごりがましいことをするな。ものは、細くても長く続かなければ繁盛（はんじょう）でない。細い道でも、しだいに踏（ふ）み広げて通るのは繁盛である。道に草を生やすようなことをするな。

272　習ったことを忘れてしまっても、それで師匠（ししょう）が得をすることはない。覚えていて、あの人のおかげで、ここまで出世ができたと言えば、それで恩を返すことになる。信心をしても、おかげを落としてしまっては、神は喜ばない。おかげを受けてくれれば神も喜ぶ。金光大神の話を聞いて、それでおかげになれば、金光大神も喜ぶ。人がおかげを受ければ、神も喜び、金光大神も喜び、人も喜ぶ。

273　真（まこと）の信心する人を見よ。慈悲（じひ）深くするから、おかげで無病息災（むびょうそくさい）、諸事よいことが子孫へ続く。信心する人は慈悲深くして、真の信心をするがよい。

274　金光様は、「日に日に悪い心を持つなよ。人に悪いことを言われても、根に持ってはいけない」と言いぬいておられた。私が「それでも、向こうが悪い心を持って来れば悪い心になります」と申したら、「それでも、悪い心を持ってはいけない。よい心を持っているようにせよ」と仰せられた。

275　人にはできるだけのことをしてあげ、人に物をあげたくてしかたがないという心を持ち、自分だけよいことをしたいというような心を持つな。

276　どんな物でも、よい物は人に融通（ゆうずう）してあげれば人が喜ぶ。それで徳を受ける。人に物をあげる時でも、自分によい物を残しておくようなことではいけない。たとえ前かけ一枚でも、よい方をあげ、悪い方を自分が使うようにせよ。

277　信心する者は犬や猫にまで憎（にく）まれないようにせよ。また、犬や猫にまでも敵をつくるな。

278　ある年の夏にお広前にお参りすると、山蟻（あり）が何匹（びき）となくご神前の方へ這（は）って行くので、お供え物にでもついてはならないと思い、「金光様、蟻がたくさんまいります」と申しあげると、「はい、蟻も参詣（さんけい）いたします。参詣すると、おかげをいただきます」と言われただけで見向きもされなかった。

279　「苗代（なわしろ）にひきがえるが入って卵を産んで困ります」と願う者に対して、金光様は、「よそでは封（ふう）じると言うが、うちでは封じない。かえるに、あぜで遊んでもらうようにすればよい。うちの田に入らないようにすれば、よその田に入るから」と教えられた。

280　神のおかげで生きていられる人間は、日々神のご用を勤めなければならない。毎日勤める家業は信心の行（ぎょう）であるから、家業をありがたく勤めれば、日々ありがたいおかげが受けられる。

281　重い物を背負っているか担いでいれば苦しいが、そうではないから信心は楽である。家業を勤めながら信心をせよ。

282　商売するというから神は見ている。商売させていただくという心になれば、神はつきまとってさせてやる。

283　農業するには、もみを水につける時、もみをつけさせてくださいと願い、苗代（なわしろ）へまくときは、天地金乃神へ、あなたのお土地にまかせてくださいと願え。また、苗（なえ）の生長と、病気、害虫のお取り払（はら）いを願え。田植えには、苗を三把（ば）ほど神に供えて、今から早稲（わさ）植えをさせてくださいと言って願え。供えた苗をお土地に植えて、根つき、生長を願え。また、害虫、病気のないように、先では豊作をいただかせてくださいと願え。そのほかの作物を植えつけする時も同じように願え。よくよく心得て、天地のお徳をいただくがよい。

284　我を放せば神になるというが、人間は、生きている間は健康繁盛（はんじょう）を願い、農家が五穀成就を願い、商売人が商売繁盛を願うのは当たり前の欲である。我を放さなければならないといって、商売人が損をしたり農家が穀物を取らなかったり、人間が早死にをしたりしたら国はもたない。

285　一年で金持ちになるような心になるな。先は長い。少しずつためたのは、尽（つ）きることはないが、一時（いっとき）に殖（ふ）やしたのはなくなりやすい。信心をする者は、我欲なことをしてはならない。ぬれ手で粟（あわ）のつかみ取りの気を持つな。人より一年遅（おく）れて金持ちになる気でおれ。

286　貧乏（びんぼう）していた時、「金光様、仕事は人の倍くらいもしますが貧乏で困ります」と申しあげたら、「それで貧乏ということはあるまい」と言われた。「でも、お金が残りませんから貧乏に相違（そうい）ありません」と申したら、「それは、どこかに無駄（むだ）があるのであろう。招かれて行くのに、先に茶づけを食べて行くようなことをしてはならない。ごちそうをいただく時には十分にいただき、ごちそうをする時には十分にしなければならない。一円の無駄をすれば十円の罰（ばち）をこうむる。それは天地が許さないからである。百円の無駄は何でもないと思うであろうが、千円の罰をこうむるから貧乏をする。無駄をしないようにすれば出世もできる」と仰せられた。

287　金光様に、「私は長い間信心させてもらっていますが、貧乏（びんぼう）で困ります」と申しあげたら、「貧乏といって、食べない時があるか」とおたずねになった。「いや、食べられないことはありません」と申しあげたら、「いくら金や物を積み重ねていても、食べられないことがあってはどうにもなるまい。健康でご飯が食べられれば、それが金持ちと同じではないか」と仰せられた。

288　金を人に貸し、催促（さいそく）をして相手を破産させたりするより、神にくり合わせを願ってあげよ。払（はら）ってもらって喜び、払って喜ぶようになれ。

289　人から出る日給はわかっても、神から出る日給はわかるまい。

290　食物はみな、人の命のために天地の神が造り与（あた）えてくださるものである。

291　何を飲むにも食べるにも、ありがたくいただく心を忘れるな。

292　食物を粗末（そまつ）にするくらいもったいないことはない。食べられるまでにするのは、容易でない。それなのに食べ物を捨てたり粗末にするのは、神のお恵みと人の骨折りとを粗末にしているのである。

293　食物は、わが心で毒にも薬にもなるものである。

294　人間は食べ物でできているのであるから、物を食べなければすぐにやせる。病気になると、欲しい物が食べられないので困る。その時に、不自由を行（ぎょう）と思い、物を不足に思わないで、万事、神を一心に頼み、万物をありがたくいただく心を磨（みが）いていると、早くおかげが受けられる。

295　大酒大食は絶食のもとになる。

296　好きな食べ物は身の薬であるから、せいぜいいただくがよい。けれども、食べ過ぎると体に障（さわ）る。それで腹八分（ぶん）目という例えもある。茶わんに八分目水を入れて持ってみよ。少し走ってもこぼれはしまい。そういう物の道理である。好きな物を食べて、もうよいと思ってから、また一杯（ぱい）飲めば一杯だけ、一（ぜん）膳食べれば一膳だけ神に無礼になる。

297　食事をする時に、このくらいでよいと思う時が、天地の親神のご分霊（ぶんれい）が分限を定められる時である。それが体に合う量である。それを、もう一杯（ぱい）、また一杯と、我食（がぐ）い、我飲みして病気になる人もあるが、これは神へ対し無礼ではないか。また、食べ過ぎ飲み過ぎして、嘔吐（おうと）をする者もあるが、これもよくない。信心する人は神の守（まも）りを心にかけており、万事不都合のないようにするのが信心である。飲食も無理に強いるのは親切ではない。国のため、人の身のため、わが身の上も思い、万物を粗末（そまつ）にしないような、真（まこと）の信心をするがよい。

298　家族中、神のことを忘れるな。何事があっても人に頼ることをするな。良いことも悪いことも、神任せにせよ。心配をするな。世は変わるものである。辛抱（しんぼう）せよ。とにかく、内輪はきげんよくせよ。ものの言い方でも、あなたこなたと言うがよい。何事もむだ口を言うな。

299　家族中親切にし合い、信心をすれば、心がそろうようになり、みなおかげを受けられる。親子でも、心が一つにならなければおかげにならない。

300　「家族が仲良くいきませんが、どうしたら、仲良くなるでしょうか」とお伺いすると、「それは、信心するとよい。信心は家庭に不和のないのがもとである。得をすると思って、物事をこらえるのが第一である。言い争わないのがもとである。家族中その事を心得て信心すれば、万事におかげをくださる」と仰せられた。

301　世間では勢信心（せいしんじん）ということを言うであろう。一人で持ちあがらない石でも、大勢で、よいしょと一度に力をそろえれば持ちあがる。家族中、力をそろえて信心をせよ。

302　女は神に近い。信心は女からである。

303　女の信心が、神のお楽しみお喜びである。懐妊（かいにん）の間、心を改め磨（みが）き、真心の子供を産んで養育せよ。日々食べ物の取りあつかいの注意不注意によって、病気にかかることもあり病気を除くこともある。子供の間は母親が子供の真心を作るのである。また、着物の洗濯（せんたく）をするのも子供の健康のためである。こうした役目を油断なく心がける者を見て神は楽しみ喜ばれる。ここに母親の大責任がある。神の前に参って自分の思うことを頼むばかりが信心ではない。神へ参らない時に信心することがたくさんある。

304　ある人が、子供の数が多くそれぞれ性格が違（ちが）うので困っているとお願いした。金光様はその人に、「もし、五本の指がみな同じ長さでそろっていては、物をつかむことができない。長いのや短いのがあるので物がつかめる。それぞれ性格が違うので、お役に立てるのである」と教えられた。

305　年寄りを大切にせよ。人間は自分の考えで先に生まれて来たのではない。みな、神のおかげで生まれて来たのである。早く生まれた者ほど世のために働きをたくさんしている道理であるから、年寄りを敬うのである。

306　元気を出して信心せよ。年をとったのを苦に病むことはない。年をとっても一人前にできるのは信心だけである。信心していると、年を重ねるほど身に徳がついて、神がかわいがってくださり、若い者が大事にしてくれるようになる。

307　隠居（いんきょ）は幾（いく）つ何十になってもするものではない。人は神が天地の内に働くようにお造りなされたのであるから、幾つ何十になっても手足の動く限りは働くのである。

308　人は一代、名は末（まつ）代というが、人間は一代の内に、死んだ後へ名の残るようなことをしておくがよい。そのように思って働けば、年寄りが集まった時、若い者が礼を言わない、喜んでくれない、と不足話をしないですむ。若い者から、おじいさんおばあさん、話が聞きたい、と言われるような信心をせよ。

309　金光大神の話を聞いて信心する人は、その子孫が安心に日を暮（く）らすようになる。子供に安心のことを伝えるのは、真（まこと）の信心である。

310　信心は何を目的にすればよいか。病人は痛いのを治してもらいたいと願い、健康な者は、作物がよくできるようにとか、商売が繁盛（はんじょう）するようにとか願って参るが、それは一時（いっとき）のことである。信心は、末の安心を楽しみにしないと続かない。末の安心のためには、自分一人がおかげを受けただけではなく、子孫に伝わる信心をすることが大切である。家庭が円満で、主人が信心しなければ、子孫には伝わらない。痛いのを願うのは信心の糸口ではあるが、それだけでは、治ればお礼参りをして、その後は参らないことになる。自分の心を改めて、よい子供を得ることを、信心の第一の目的としなければならない。一代の信心は神が喜ばれない。

311　氏神（うじがみ）様の祭り日には、家々でたいそうなことをしてお祭りをするが、天地金乃神からは日々のおかげを受けておりながら、その祭り日には特別のこともしないで、ろうそく一本を供えるくらいのことである。白いご飯を炊（た）いて、おなますでもつけて供えるようにせよ。そうすれば子供でも、お母様、何事ですかと言って聞くようになる。わけを話してやると、神の恩を知るようになり、大きくなって、だんだん自分でも尊ぶようになる。

312　子供が十五歳にもなれば、そろそろ身しのぎをする術（すべ）を教えこまなければならない。自分のことは自分で信心しておかげを受けさせるようにしなければならない。親から見れば、大きくなっても子供のように思うけれど、かわいがり過ぎたり、世話をやき過ぎると、先のためにならない。かわいい子には旅をさせよ、ということがあろう。信心のありがたいことを話してやっていれば、ひとりでに親の跡（あと）を継（つ）いで信心するようになる。

313　話を熱心に聞くのはよいが、わが家へ帰り、大変な信心家になって、うちの者を叱（しか）るばかりして困らせてはならない。世間には、あの人は講釈（こうしゃく）はよいが、という講釈だおれがある。信心する者は、神の話を聞いて納得したら、第一に、自分がしてみせて、それから言い聞かさなければならない。口ばかりの先生ではうちの者も聞かないし、神にも相すまないことになる。

314　子は、わが力で産むとは思うな。みな親神の恵みによるのである。

315　女は世界の田地である。世界の田地を肥やしておかなければ尊いものができない。種をまいても、やせ畑にはよい物ができない。女は妊娠（にんしん）の時が大事である。心の良い悪いは子にうつる。体に子が宿ると、食事が進み、珍（めずら）しい物でも欲しいという心になりやすいが、隠（かく）れて食べるようなことでは、よい子はできない。陰（かげ）ひなたの心を持った子ができるから、そばの者がよく気づかってあげるがよい。

316　懐妊（かいにん）中に、考え違（ちが）いをして無礼をしたり、間引こうと思う者もあるが、神からお与（あた）えくださるだけは産んで養育するがよい。金は人間の力で調えられるが、子供は神のおかげでなければできないものである。子を産む者は、神のご用を勤めると思って辛抱（しんぼう）すれば、これが信心になる。

317　子供が大勢できても、人間考えで間引くことはするなよ。神は、人間の寿命（じゅみょう）があるのとないのとは、よく承知している。人間ではそれがわからない。寿命のないものなら神が引き取ってやる。

318　母の胎内（たいない）は器のようなものである。水は円（まる）い物に入れれば円く見え、四角の物に入れれば四角に見える。母親が真（まこと）の心を持ち、神の子が胎内にいるという尊い心持ちで、家業を潔（いさぎよ）く勤め、親兄弟に親切をして、信心に油断なく、教育にも油断がなければ、よい子が育ち、先祖への無礼もなく、国も栄えるもとになる。日々家業を勤める心と真心とを失わないよう、今月今日で信心するがよい。

319　食物を粗末（そまつ）にすると罰（ばち）が当たると言うが、そういうことは言わない方がよい。子供には、叱（しか）るより教えてやれ。穀物を作るのは農家であるが、それも、神のお恵みがなければできるものではない。神のお恵みをいただく心になるよう、子供に教えてやれ。

320　信心していれば、冗談（じょうだん）にでも悪いことを言ってはならない。言うとおりになってくる。子供を叱（しか）るのでも心得ておれ。あほうをするな、ばかがなどと、言ったりして叱ってはならない。お利口だからするな、と言えば、子供もお利口だからやめようと思って利口になるが、あほう、あほうと言うと、あほうだからしてやれと思って、あほうになる。どうしても言うことを聞かない時は、黙（だま）って尻（しり）をつねっておけ。

321　子供を叱（しか）り叱り育てるな。叱り叱り育てると、大きくなって道楽（どうらく）者になる。また、恐（おそ）れさせ恐れさせ育てると臆病（おくびょう）になる。

322　子の頭をたたくより、自分の頭をたたけば、すぐおかげになる。

323　体の丈夫（じょうぶ）を願え。体を作れ。何事も体がもとである。

324　痛いのが治ったことだけがありがたいのではない。いつも健康であるのがありがたいのである。

325　神がお造りくださった人間であるから、病気にかかった時に、神に頼んで健康にしてもらうように願うのは、道理にかなった信心ではないか。

326　みな、病気の名前や病気のもとは不思議によく知っているが、おかげの受けられるもとを知らない。病気のもとよりは、おかげのもとをたずねてみよ。

327　信心しているから一生患（わずら）わないと思うな。日や月でも、日食もあれば月食もある。そんな道理のものである。信心していても、人の身は生身（なまみ）であるから患うことはあるものと思い、また、患っても死なないと心に決めておけばよい。

328　鉄でも使えばすり減る。人間は生身（なまみ）であるから痛いかゆいがあるのは当たり前である。鍬（くわ）でも刃先の焼き直しをしたら、はじめよりよく切れるようなもので、人間も時々痛いかゆいがあるのは刃先の焼き直しである。これがもとで信心もできるようになり、これが修行になって信心も進んでいく。人間は勝手なものであるから、痛いかゆいがあると信心ができるが、何事もなかったら信心が寝入（ねい）る。

329　信心していて病気で苦しむ時は、刑（けい）の取りさばきであると思えばよい。辛抱（しんぼう）せよ。その辛抱が信心である。

330　一週間でおかげをいただいたとか、二週間でおかげをいただいたとか言うが、それは一時、神がその病気をつかまえていてくださるだけのことであって、治ったと思うと当てが違（ちが）う。大体、重い病気は三年とか五年とか、また十年もたたなければ治るものではなく、もとの体にはなれない。その代わり、もとの体になれば、もう患（わずら）うことはない。神が病気を治してくださる時は、病気の根から取り払（はら）ってくださるのである。腹の中に病気という一本の木が生えたとすると、それを枯（か）らそうとして医者は薬を使うが、枝葉はすぐに枯れても根は残る。根が残るから、また生える。神が治してくださるのは、暇（ひま）がかかる代わりに、病気の根から治してくださる。

331　長患（わずら）いの人や代々難儀（なんぎ）の続く人が、神のおかげを受けるのは、井戸替（が）えをするようなもので、八、九分（ぶ）替（か）えて、退屈（たいくつ）してやめれば掃除（そうじ）はできない。水はやはり濁っている。信心も途中（とちゅう）でやめれば病気災難の根は切れない。井戸水は清水（せいすい）になるまで、病気災難は悪い根の切れるまで、一心に神へ願い、健康で繁盛（はんじょう）するように元気な心で信心をせよ。

332　「長らくの病気ですが、治るでしょうか」と伺ったところ、金光様は、「病気が治るのがよいか、治らないのがよいか。治る方がよいのであろう。治してもらいに参って来たのに、治るであろうかと思ってはならない。今日からしだいに全快におもむくと思え。しだいしだいによくしてもらい、体が丈夫（じょうぶ）になってきさえすれば、年はとっても病気は治る。しだいによくなると思って信心せよ」と仰せられた。

333　祈れ薬れ、にすればおかげも早いが、薬れ祈れ、にするからおかげにならない。

334　痛い所があったら、お神酒（みき）をつける心になればおかげがある。

335　お参りして、ありがたい話と思って聞いている時には心が円（まる）い。わが家でいろいろのことが思われる時には腹が立ち、心に角が立つ。腹を立てると、顔やくちびるまで色が変わり、また、体の弱い人は頭痛がしたり、癪（しゃく）の病気がある人は腹がさしこむようになったりして困る。それは、腹が立つと、その勢いで体が固くなり、血の巡（めぐ）りがとまるからである。それで体に障（さわ）りが出る。腹が立つのが少し治まると、とまった血が働き出す。腹が立つ時には、心の鏡を磨（みが）いてもらうように、神を頼む心に改めるがよい。信心して病気にならないようにするのが、わが心でわが身を救い助けるということである。

336　お札（ふだ）をくださいと願ったところ、「お札はない。お札は人間の目当てにするもので、お札からおかげが出るのではない。神は目には見えないが、そこら辺りいっぱいにおられるので、神の中を分けて通っているようなものである。願うのは壁（かべ）を目当てに頼んでもよい」と仰せられた。

337　信心して神に取りすがっていたら、縁起（えんぎ）を気にすることはない。四は死に通じると言うが、それは悪い方へ取るからである。四なら幸せのしに取れ、よいのよに取れ。みな、よい方へ取って信心すれば、いっさいおかげにしてくださる。

338　人が死ぬと、四十九日の間は神棚（かみだな）へ張り紙をして閉門をし、神には手も合わさない者がある。それでも、天地金乃神のお土地は踏（ふ）まないではいられまい。いろいろと神への無礼をしている。

339　ある人が、門まで来ては帰り、何度も来たり帰ったりしているのを、集まっていた信者が見て、「金光様、あの人はどうしたのでしょうか、参りそうで参りませんが」と伺ったら、「あの人は、親が死んで忌（い）みの内であるからと思い、遠慮（えんりょ）して参れないのである。この道には忌み汚（けが）れはないから参ってもよいと言ってあげなさい」と仰せられた。

340　だれでも、生まれる日と死ぬ日とは自由にならないのに、生きている間だけ、日柄（ひがら）とか何とかと言う。どのような所、日、方角も、人間に都合のよいのが、よい所、よい日、よい方角である。日柄方角などで、神が人間を苦しめることはない。

341　家を建てる時、日柄（ひがら）方角を言う必要はない。暦（こよみ）では吉日であっても、雨が降れば、棟木（むなぎ）などの大木は上げにくく、過ちがなければよいが、と心配をすることになる。神にすがって、いつでも吉日にしてもらう方が安心であろう。

342　疑うならば、鬼門（きもん）の方角へ家を建ててみよ。神が叱（しか）らないと言ったら、叱りはしない。臆病（おくびょう）を去れ。おかげをやる。

343　縁談（えんだん）には、相性（あいしょう）を調べ見合わせるより、真（まこと）の心を見合わせよ。

344　建築や縁組（えんぐ）みなどをするのは勝手であると思い、お願いしないでする人は、お叱（しか）りを受ける。天地金乃神にお願いしなければならない。

345　この道では、やくとは世間でいう厄（やく）ではなく、役目の役という字を書く。やく年とは、役に立つ年、ということである。大やくの年とは、一段と大きな役に立つ年と心得て、喜び勇んで元気な心で信心をせよ。草木でも節（ふし）から芽が出て、枝葉を茂（しげ）らせているであろう。しかし、節は堅（かた）くて折れやすい。人間のやく年も同じことである。信心辛抱（しんぼう）していけば、節年を境に年まさり代まさりの繁盛（はんじょう）のおかげを受けることができる。

346　世が開けるというけれども、開けるのではない。こわれるのである。そこで、金光大神が世界を助けに出たのである。

347　今の世は知恵の世、人間がさかしいばかりで、わが身の徳を失っている。

348　今の人は何でも時勢時勢というけれど、たとえ時勢に合ったとしても、神徳をいただかなければおかげにはならない。

349　神があってお上（かみ）ができたのに、お上ができたら、神がお上の支配を受けることになっている。

350　国のため、人のため、わが身のためも思い、すべてを粗末（そまつ）にしないように、真（まこと）の信心をせよ。

351　世のため、人のため、わが身のためを思って、家業をありがたく勤めることができれば、それがおかげである。それが神の心にかなうのである。

352　金光様が、「私は生神ではない。百姓である。天地金乃神様に頼めばよい。私はただ、神様に申しあげるだけのことである」と仰せられ、ご神前に進まれると、すぐ神から、「金光大神は、自分は百姓であるから天地金乃神に頼めばよい、と言うが、金光大神があって天地金乃神のおかげが受けられるようになった。神は何千年来、悪神邪神（じゃしん）と言われてきたが、金光大神があって神は世に出たのである。神にとっての恩人は金光大神である。人間も、金光大神があってこそ神のおかげが受けられるようになった。人間にとっても恩人である。神からも人間からも両方の恩人は金光大神である。金光大神、と頼んでおけばよい。金光大神の言うことを聞いてそのとおりにすれば、神の言うことを聞くのと同じである。金光大神の言葉にそむかないように、よく守って信心せよ」とお知らせがあった。その後、金光様は、「今、神様があのように仰せられたが、私は神様の番人のようなものであるから、私に頼んでもおかげはいただけはしない。どうあろうとも、天地金乃神様、と一心にすがれよ」と仰せられた。すると、「金光大神はあのように言うが、金光大神にすがっていればよい。まさかの折には、天地金乃神、と言うにはおよばない。金光大神助けてくれ、と言えば、すぐにおかげを授けてやる」とお知らせがあった。

353　金光大神の取次で、神も立ち行き、人間も立ち行く。人間あっての神、神あっての人間、子のことは親が頼み、親のことは子が頼み、天地（あめつち）のようなもので、あいよかけよで頼み合いをせよ。

354　金光大神の話は、学者の話や講義と違（ちが）って、ここが続き、ここが切れ目ということがない。天地のある間は、天地の話が尽（つ）きることはない。金光大神は天地の道理を説くのである。

355　「天地金乃神と人間との間柄（あいだがら）を、参って来る者に話して聞かせよ」と、神が仰せられるので、金光大神は話をしているのである。

356　金光大神がご神前を離れれば、世の人々がけが過ちをするかも知れない。世の人々にけが過ちのないように、本当のおかげが受けられるようにと願っていると、金光大神はここを動く暇（ひま）がない。

357　金光様は、いつも、「たとえ、この身は八つ裂（ざ）きの仕置きにあい、村々の辻に曝（さら）し者にされるようなことがあっても、私の屋敷跡（やしきあと）に青草が生えるようになっても、少しもかまいません。世界の人々が、生神金光大神、と真心で一心に願えば、どのような願い事でもかなえてくださいませ」と願っておられた。

358　「金光様、あなたがお隠（かく）れになりましたら、この道はどうなりましょうか」とお伺いした。すると、「心配することはない。形を隠すだけである。肉体があれば、世の人々が難儀（なんぎ）するのを見るのがつらい。体がなくなれば、願う所に行って人々を助けてやる」と仰せられた。

359　生神金光大神といっても、今までは形があったから暑さ寒さも感じたが、これからは形を去って真（まこと）の神になるから、一目（ひとめ）にすべての者を見守ることができる。

360　月も雲に隠（かく）れることがあろう。隠れても月は雲の上にある。金光大神も生身（なまみ）であるから、やがては身を隠す時が来る。形がなくなっても、どこへ行くのでもない。金光大神は永世生き通しである。形のあるなしに心を迷わさないで、真（まこと）一心の信心を立てぬけ。美しい花を咲（さ）かせ、よい実を結ばせてくださる。

361　人民のため、大願の氏子を助けるため、神が金光大神を身代わりにさせる、金光大神のひれいのため。

362　金光大神のことを生神（いきがみ）と言うが、金光大神ばかりではない。この広前に参っている人々がみな、神の子である。生神とは、ここに神が生まれるということで、金光大神がおかげの受けはじめである。みなもそのとおりにおかげが受けられる。

363　人は金光大神のことを生神（いきがみ）と言うが、金光大神も、あなた方と同じ生身（なまみ）の人間である。信心しておかげを受けているまでのことである。あなたも、神の仰せどおり真（まこと）一心に信心しておかげを受け、人を助けて神にならせてもらうがよい。

364　無学で人が助けられないということはない。学問はあっても真（まこと）がなければ、人は助からない。学問が身を食うということがある。学問があっても難儀（なんぎ）をしている者がある。金光大神は無学でも、みなおかげを受けている。

365　人を一人助ければ、一人の神である。十人助ければ、十人の神である。

366　わが身、わが一家を練習帳にして、神のおかげを受けて人を助けよ。

367　神から金光大神に、いつまでも尽（つ）きないおかげを話にしておく。金光大神が教えたことを違（ちが）わないように人に伝えて真（まこと）の信心をさせるのが、神へのお礼である。これが神になるのである。神になっても、神より上になるとは思うな。

368　信心しておかげを受けて、難儀（なんぎ）な人を助ける身にならせてもらうがよい。神の心になって、受けたおかげを人に話して真（まこと）の道を伝えるのが、神へのお礼である。それが神のお喜びとなる。信心するといっても、これまではみな神を使うばかりで、神に使われることを知らない。天地金乃神は人を使いとなさる。神に使われることを楽しみに信心せよ。

369　「私はこれまで広大なおかげをいただいていますので、何か神様にお礼をさせていただきたいと思いますが、何を奉（たてまつ）ったら、この神様は一番お喜びくださるでしょうか」とおたずねした。金光様は、「神にお礼をするのに物を奉ってすむのならば、これまであなたが神のおかげを受けられたそのお礼には、何もかも奉っても足りはしまい。神はそんなものをお喜びになるのでもなく、また望んでおられるのでもない。神のありがたいことを知らない世の中の人々に、あなたがおかげをいただかれたことを教えてあげよ。そうすれば、その人々が助けられ救われる。それが神の一番喜ばれるお礼である」と仰せになった。

370　生きている時に神になっておかないで、死んで神になれるか。

371　自分のことは次にして、人の助かることを先にお願いせよ。そうすると、自分のことは神がよいようにしてくださる。

372　今まで長い間痛くてつらかったことと、今おかげを受けてありがたいことと、その二つを忘れるな。その二つを忘れさえしなければ、病気は二度と起こらない。これからは、人が痛いと言って来たら、自分のつらかった時のことと、おかげを受けてありがたかった時のことを思い出して、神に頼んであげよ。自分はもう治ったから人のことは知らないというような心を出すと、またこの病気が起こる。今の心でおかげを受けていけば、病気が起こらないばかりか、子孫の末までおかげを受けられる。

373　人の悪口を言う者がよくある。もし、その場にいたら、なるべく逃げよ。陰（かげ）で人を助けよ。陰で人を助けておけば、おのずと神の恵みがある。

374　人に悪く言われた時に、信心しているからこらえなければならない、と思ってこらえるくらいではまだいけない。先方の心をどうぞ直してあげてください、と拝んであげるようにならなければいけない。

375　たとえ人にたたかれても、けっして人をたたいてはいけない。人に難儀（なんぎ）をさせるな。よい心にならせてもらえばありがたいと思い、すれ違（ちが）った人でも拝んであげよ。できるだけ人を助けるようにせよ。

376　信心する人は、人に頭をたたかれても、私の頭は痛みませんが、あなたの手は痛みませんか、という心になり、また、頭から小便をかけられても、ぬくい雨が降って来たと思えばよい。

377　ある時、金光様の家の麦わらの垣（かき）に、だれかが火をつけて焼きかけになっていた。それを見た人が、「金光様、こういうことをする者には罰（ばち）を当てておやりなさい」と言ったら、「こういうことをする者こそ神に願って、心を直してあげなければならない」と仰せられた。

378　盗難に遭（あ）った時は、大難を小難に逃（のが）れさせてくださったと神にお礼を言い、また、盗人（ぬすびと）が本心に立ち返り正業（せいぎょう）に就くように、と神に願ってあげよ。

379　金光大神があって神は世に出た。金光大神の話していることを、そのまま人に聞かせてあげればよい。あなたが、これまでおかげを受けてきていることを話せば、それでよい。何も、そう心をつかわなくてもよい。後ろに金光大神がひかえている。

380　神が金光大神に教えてくださり、話して聞かせよと言ってくださるから、話してあげる。それを聞いて、子供にでも他人にでも話して聞かせてあげよ。めいめいにそれを心得、神はありがたいとわかって信心する人が一人でもできれば、神がお喜びになる。そうなれば、あなた方も神のご用に立つことになる。

381　たびたび参られても、何も手から手に渡すものはない。私のは話がおかげであるから、帰られたら話をして、おかげを受けさせよ。世の中に他人ということはない。

382　道を歩きながら話をしても、腰（こし）をかけて話をしても、心から納得すればおかげになる。

383　機（はた）を織りながらでも着物を縫（ぬ）いながらでも、教えをしてあげよ。教えてあげれば人は助かる。

384　教えてもらって信心しておかげを受けたら、人にも教えてあげなければ、神へのお礼にならない。信心する者の役目がすまない。

385　寒い日であったが、お参りの途中（とちゅう）で気の毒なおじいさんに遭（あ）い、かわいそうに思って、着ていた物を脱（ぬ）いであげた。それからお参りすると、金光様が、「今日は結構なおかげを受けたなあ。不幸せな者を見て、真（しん）にかわいいという心からわが身を忘れて人を助ける、そのかわいいと思う心が神心である。その神心におかげがいただける。それが信心である」と仰せられた。

386　神に参るだけが信心ではない。至急の時には、お礼を当てにするようなことでなく、格別の親切を尽（つ）くすがよい。急難にかかっている人がいたら早く行って助けてあげ、火事があれば早く行って火を消す手伝いを潔（いさぎよ）くすれば、これが真（まこと）の信心親切となる。何事にも心がけておれ。

387　病人に品物を贈る親切だけが見舞（みま）いではない。見舞いの言い方で、気分が強くもなり弱くもなる。せっかく見舞いに行く親切があるなら、病人の心が元気になる見舞いを言ってあげると、病人の心が広く大きくなる。この時から、神のおかげをすぐにいただけるようになる。金光大神の話したことを、病人や家族に話してあげれば、悪いことを思わないで、安心して全快することを楽しむ。人によると、見舞いに行っても病人を見て涙（なみだ）を流し、さぞつらかろうと言ってなでさすりして、病人の心を苦しめる者もある。また、病人の顔色を見て嘆（なげ）き、やせたのを見て嘆く。家族へはあちこちの悪い話を集めて聞かす。そうすると悪い思いが満ちて、神のおかげを入れる所もないようになる。そのような心配をさせては、見舞いに行って見舞いにならない。病人の心が元気になるように話をし、また家族の者には余計な心配をさせないように話し、できるだけの手伝いをせよ。また、貧しい人には金や品物を贈るなど、助ける道はいろいろある。何事にも心がけて信心をせよ。

388　農業する人は、自分の田の水の様子を見に行ったら、人の田の水も見てあげれば、人もまた自分の田の水を見てくれる。互（たが）いに親切にし合えば、人も喜び、神もお喜びになる。

389　天地の間のおかげを知った者がいない。しだいに世界中、日の照らす下、万国まで残りなく金光大神ができ、おかげを知らせてやる。

390　天地の道がつぶれている。道を開き、苦しんでいる人々が助かることを教えよ。

391　道は人が開け。おかげは神が授ける。

392　道を立てる者は、目先の欲を放して末の徳を取れ。どれほど艱難（かんなん）苦労をしても、人の杖（つえ）とも柱ともなるがよい。

393　世の人があれこれと神のことを口端（くちは）にかけるのも、神のひれいである。人の口には戸が閉（た）てられない。人は先のことを知ってはいない。いかに世の人が顔にかかるようなことを言っても、腹を立てるな。神が顔を洗ってやる。

394　お道のご用をさせていただこうと、真（まこと）の教えをする者が一町に一軒（けん）、一村に一軒になれば、お道を伝えるにはらくである。

395　あなた方は小さいことばかり考えているが、金光大神は、世界をこの道で包み回すようなおかげがいただきたいと思っている。

396　欲を捨てることについておたずねした時、「いやいや、私にも欲がある。世界の人を助けたい欲がある。欲を捨ててはいけない」と仰せになった。

397　金光様は、「道を世界中に広めなければならない」と常に仰せられていた。

398　信心をせよ。はじめは一人でも、後には日本中の人が信心をするようになる。外国の人までも信心をするようになる。金光大神もはじめは一人であったが、今ではこのとおりに大勢になった。

399　真心（しんじん）の道を迷わず失わず末の末まで教え伝えよ。

400　金光とは、金（きん）光るということである。金は金乃神の金、光は天つ日の光である。天つ日の光があれば明るい。世界中に天地金乃神の光を光らせて、おかげを受けさせるということである。

金光教本部教庁　〒719-0111 岡山県浅口市金光町大谷320　TEL.0865-42-3111
FAX.0865-42-4419　e-mail: w-master@konkokyo.or.jp